

ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2008/1 第43号

点から線、やがて面へ…

日本ホタルの会理事 井上 務

平成の今、ご自宅のお庭で、お部屋で、ホタル飼育に挑戦されている方が意外に多いのではないのでしょうか！私が知るだけでもその数は10軒をこえています（静岡県・埼玉県・東京都で）。全国ではどのくらいの数になるのでしょうか？

この動き、ホタル復活への兆しと捉えたいのですが皆さんはどうお考えでしょうか？

数年前、こんなことがありました。あきる野市で開催されたホタルに関する勉強会終了後、私がソファでひとりお茶を飲んでいた時のことです。向かい側のソファでタバコを吹かしながら私をジーッと見つめているオジサンがいることに気付きました。気になる強い視線でしたので私も彼を見つめました。しばし時間が経過した後、二人はほぼ同時に「オー！」と大きな声を出していました。

「井上じゃないか！」

「Sだよナ！」

私とS君は高校時代の同級生。30数年ぶりの再会でした。

「ところで、お前、どうしてここにいるの？」

二人の共通した疑問でした。

「ホタル飼育をしている学生たちの面倒をみているから」と彼に告げると「自宅の庭でホタルを飼育しているから」との回答。「ここからすぐ近くだから今から来いよ」ということになったのでした。「奇遇だね、まさか二人がホタルで結び付くとはネ」と意気投合、彼の自宅を目指しました。

ムササビが棲むという大木の下に手作りのホタル飼育施設がありました。井戸水を活用したオリジナルな装置から毎年数百のホタルが羽化し、庭を舞っていると話してくれました。翌年、そこで見事に乱舞するホタルを確認しました。

こんな例もありました。ペットボトルを利用した飼育装置がピアノの上に置かれ、そこでホタル飼育をされているNさんのお宅にお

邪魔したことがあります。「幼虫上陸の頃、装置から逃げ出し、絨毯の上を歩く幼虫に出合うことがあるのです」とNさんは苦笑されていました。Nさんはお庭ではなく、お部屋の一隅、小さなスペースでホタルを飼育されていたのでした。

他にもIさん、Hさん、Nさん、Aさん、Tさん…。これらの皆さんに共通することは「近くの小川や里山等で我が家出身のホタルを飛ばしてみたい」でした(既に実現された方もいらっしゃる)。お庭、お部屋でホタルを飼育されている方々を線で結べばそこには面ができます。その面の多くは、かつてホタルが乱舞していた地域であることがわかってきます。遺伝子を調べることで地域固有のホタルが存在していることが判明した今、可能な限り地域に固有なホタルの復活を目指して頂きたいと願っています。

ところで、自宅でホタルを飼育する人が身近に点在する時代が果たしてこれまでの日本の歴史にはあったのでしょうか？ 寡聞にして知りません。小西先生に伺ってみたいと考えているところです。

その小西先生が出版された「虫と人と本と」(創森社刊：文末に表紙を紹介)という本を読みました。本の帯には「いかに虫に魅せられ、究めてきたのか」とあり、内外の昆虫学者をはじめとする多くの先人たちが虫にどう関わってきたのかの克明に綴られています。神田左京に関する記述も改めて興味深く読みました。

その著作を読みながらこんなことを考えました。お庭で、お部屋で、そして多くの地域でホタルを飼育される皆さんの行動、そして

私達「日本ホタルの会」の取り組み、これらの動きは、まだ小さなホタルの明滅のような存在なのかもしれません。しかし、やがて深化され歴史的な意味をもってくるのでは？と考えました。

統一ドイツ初代大統領ヴァイツゼッカーは「過去の歴史に目を閉ざす者は、再びその過ちを繰り返す」と語りました。引用がちょっと大袈裟なようにも感じますが、私達も会の活動の歴史的な意味を常に考えていきたいと思えます。点から線、やがてその広がりが面へと展開されることが予感される今、「ホタルを通じて身近な自然を考え、里山に心和む自然環境を取り戻す」を現実とするべく、更に頑張って参りたいものです。

私達の活動について、その歴史的な意味をちょっとだけ考えてみた今日この頃であります。



ポルトガルで開催された国際ホテルミーティング

日本ホテルの会副会長 鈴木浩文

2007年6月22日から24日にかけて、ポルトガルで国際ホテルミーティング (Firefly Meeting) が開催されました。会場はイベリア半島西岸のポルトにある自然公園内の宿泊施設 (Parque Biológico de Gaia) で、そこでは、昆虫、鳥、両生・は虫類、植物などいろいろな自然観察の催し物が開催されていました。

参加者は、ポルトガル、ベルギー、スイス、イタリア、デンマーク、イギリス、アメリカとほとんどヨーロッパからでしたが、アジアからは日本、台湾、タイからの参加がありました。演題はホテルの生態、行動、保全に関するもので (25題ほど)、系統分類や発光反応に関するものは2題ほどでした。

台湾からは、四季を通じてみられるホテルが紹介され、その中でも水生の幼虫が水面の裏側 (水中) を逆さになって歩くように泳ぐ條背蛍 (*Luciola substriata*) が注目されていました。この種は中国大陸にも分布していますが、近縁種がタイからも報告されていました。スイスからは、一般市民を対象としたホテルの保護・啓蒙活動に関する報告があり、パンフレットが配られ

図1.
台湾で四季を通して見られるホテルのパンフレット



図2.

上: スイスで使われているホテル保護活動のパンフレット

下: 火垂の墓の紹介わたしは元気をいただきました。生き物はみんなつながって生きているのです。青い地球がいつまでも美しい星でありますように。



ました。そこには、スイスで見られるホテルの種類、生態、生息環境、発光パターンなどが記載されており、ホテルを扱った教育用フィルムの上映スケジュールも載っていました。その中には日本の「火垂の墓」も紹介されていました。

次のサイトにプログラムや様子の写真が掲載されています。

<http://www.fireflies.tk/>

このミーティングは各年で開催されるということですが、次に受ける国や資金繰りなど問題が山積みようです。国際レベルでのホテルイベントにならないことを祈るしだいです。

第15回日本ホタルの会シンポジウム（詳報）

日本ホタルの会理事 洪江桂子

8月25日、「ホタルを育てることの意味を考える」をテーマとして、第15回日本ホタルの会シンポジウムが東京都全水道会館にて開催されました。

近年、生物多様性保全の観点からホタル幼虫の放流方法が問題となっています。生物多様性を保全するというグローバルな必要性に対して、ホタル保全を通してどのようにローカルに対応していったらよいのか、ということについて考える大変有意義な機会となりました。

シンポジウムでは、まず鷲谷教授(東京大学)より基調講演をいただきました。「生物多様性を守るということ」というテーマで、国際的自然保護ルールの見地から、生物多様性保全について解説をいただきました。グローバルな多様性を保証するための、ローカルな地域固有性の重視ということについて、サクラソウを事例にご講演いただきました。そして、日本でも様々な自然保護活動の中で「種内の多様性」を認識し、来たるCOP10では日本らしい保全事例を世界に示せるように、それぞれの生物保全活動を通して試みていくべきかというご提言をいただきました。

その後、ホタル保全・再生の最新事例をご紹介いただきました。ヒューマンデザインの千葉氏より「人工飼育による環境づくりの技術」、桜螢保存会の後藤氏より「創価大学螢桜保存会の取り組みについて」、横沢入里山管

理市民協議会の福田氏より「横沢入・里山の再生へ」についてご講演いただきました。

千葉氏からは、豊富なご経験から様々な再生手法を具体的にご教示いただき、各地で再生活動に取り組む本シンポジウム参加者には大変参考となるご講演をいただきました。さらに長年のご経験より、人工飼育を行う場合でも長期的視野にたった取り組みを行うようご提言いただきました。

後藤氏からは、生物多様性喪失に繋がる他地域の幼虫放流を止め、幼虫全てを地域内ホタルの再生に移行するという事例をご紹介いただきました。種内の多様性をグローバルに保全していく重要性を認識した時、これまでのホタル再生活動を一から見直し行動されていった内容に、学生活動らしい若々しい柔軟性に、一同、感銘を受けるとともに、学ぶことの多いご講演でした。

福田氏からは、昭和20年代と変わらない里山を守りとおしてこられている活動を紹介いただきました。一同、その情熱と行動力に深く感銘を受けると共に、単に「ホタルがいる里山」ではなく、「様々な生物と共に、ホタルも棲んでいる里山」という位置づけの保全活動内容は大変勉強になるご講演でした。

総合討論においては、「ホタルの地域系統はどのように異なり、どうして地域外のホタルを移入することが問題になるのか？」というテーマを中心に議論が展開しました。その

中で、鈴木理事(オリンパス主任研究員)より、保全単位として把握されているホタルの地域系統の最新研究成果についてご解説いただきました。

シンポジウムの最後には、鷺谷教授よりホタルの保全活動というローカルな活動においても、常にグローバルな生物多様性を保証するという視点を忘れずに十分配慮を行いつつ

活動を行ってくださいとのご教示をいただきました。さらに、それらの保全活動が地域の発展に結びついていくような事例を多く残して行ってくださいとのご提言をいただき、シンポジウムを閉会いたしました。

大勢の皆様にご参加いただき、共に有意義な時間を持てましたこと、心より感謝申し上げます。

.....

■読者投稿の募集

日本ホタルの会では、ニュースレターへの、皆様の投稿をお待ちしています。ホタル、環境保全などに関する調査、研究報告、各地域での活動報告をはじめ、読者の皆様の体験、ホタルとの出会いなどを紹介する「私とホタル」のコーナーに掲載する記事を募集しています。

ご希望の方は、題名、氏名等と簡単な内容を記載して事務局あてお送り下さい。

新連載

ホタルの名前について（１）

日本ホタルの会副会長 鈴木浩文

はじめに

現在認識されている生き物には、ゲンジボタルやヘイケボタルなど、それぞれ名前が付いています。ヘイケボタルは、地方によってはヌカボタルやヒメボタルなどの名前で呼ばれることもあったようです。これらの名前は日本語の「和名」です。和名の付け方については特に規定はありませんし、地方ごとの呼び名が存在しても不思議ではありません。しかし、ヒメボタルという名は、ヘイケボタルとは別のホタルにもあてがわれていますので、このような場合、ヘイケボタルの記述なのかヒメボタルの記述なのか混乱が生じてしまいます。また分類学では、当初の分類とは違い後に別の分類学的な扱いに変更になった場合、そのままの和名を使い続けることが多いようですが、新たな和名を付けることもあります。一般に、むやみに名前を変更することは、混乱を招く原因にもなってしまいます。ホタルでは、当初ホタルではなくベニボタルやホタルモドキの仲間として扱われていたのが、後にホタルの仲間に入れられたものもありますので、図鑑や解説本によっては異なった名前があてがわれているホタルがあります。

このシリーズでは、代表的な図鑑や解説本で扱われているホタルの「和名」を対応づけて紹介していきますので、みなさんの理解の助けになればと思います。

学名について

和名は日本だけで通用する名前ですが、命名の仕方に規定はありませんが、学術的な記述には世界的に共通する名前が必要になります。

それが学名です。学名は、動物、植物、細菌でそれぞれ国際命名規約が定められており、ラテン語で表記されます。種の学名は、ゲンジボタルの *Luciola cruciata* のように2つの単語から成る二名法という方式が採られます。第1語の *Luciola* は属名で、第2語の *cruciata* は種小名になります。ちなみに *Luciola* は光、*cruciata* は十文字という意味になります。また、*Luciola cruciata* Mo-tschulsky, 1854 と表記されることもあります。Motschulsky は *Luciola cruciata* の命名者で、その記載文が1854年に発表されたことを意味します。属は形態的に似たものを集めた単位で、この属にはヘイケボタルなども入ります。このように種の学名は属名と種小名によって表されます。

次回からは、図鑑や解説本で扱われているホタルの和名の扱いについて、対応関係を紹介していきます。

事務局からのお知らせ

活動報告

ホタルサミットin羽村

去る2007年10月28日(日)に東京都羽村市生涯学習センターゆとろぎホールにおきまして、「2007ホタルサミットin羽村」を開催いたしました。ホタルサミットは、東京ホタル会議が長年主催しているもので、日本ホタルの会は昨年に続いて2度目の共催となりました。東京ホタル会議とは、これまでも観察会などの共同開催を行い、相互協力してまいりました。今後とも、より良い協力関係が継続できればと願っています。

さて、ホタルサミットは、当地で長年活動されている羽村ホタル研究会の羽村康次郎事務局長の司会進行で始まり、東京ホタル会議小西正泰議長、日本ホタルの会本多和彦からあいさつがあり、その後、羽村ホタル研究会宮村武文会長と羽村市並木心市長から丁重なる歓迎の言葉がありました。

ゲンジボタルの一生を映したビデオを観賞した後、講演の部へと移りました。最初に特別講演として神奈川県環境科学センター石綿進一さんから、今話題となっているコモチカワツボについて「ゲンジボタルと外来の貝類―爆発的に増える外来種、神奈川県の実例から―」と題し、お話がありました。講演では、コモチカワツボの生態、分布状況、ホタルに関連する情報などをお話いただき、外来種による生態系かく乱の問題とともに、ホタルへの影響も懸念される貝類のことなので、皆さん聞き入っていました。続いて、羽村ホタル研究会副会長小作庫生さんから、羽村のホタル復活の活動について「羽用水にホタル蘇る」と題し講演があり、野川ほたる村村長小西正泰さんから野川一帯に多く見られる昆虫の話がありました。さらに、富士見町に蛍を呼び戻す会山本英樹会長から「昭和用水に蛍よみがえる」、むらやまホタルを育てる会の外立綾子さんから「二つの拠点でホタルの舞う日を願って」と題し、地域の熱心な活動の様子が報告されました。

講演終了後、彦坂和夫東京ホタル会議副議長がコーディネーターを務め、総合討論が行われました。会場からの熱心な意見に各講師や主催者あるいは会場から応答がありました。この中で、コモチカワツボに日本ホタルの会はどのような対応をするかというご質問がありましたので、次のように答えました。

『日本ホタルの会がコモチカワツボについて直接排除を呼びかける活動や実態調査をすることは現時点で考えていない。しかし、生物の移動の問題を含め生態系を維持していくと考えるのは当会の理念の一つなので、こういった問題について、情報を発信し、サミットやシンポジウムなどで、皆さんと考えていくことにしたい。』

最後に、柴俊男東京ホタル会議副議長からあいさつがあり、閉会となりました。当日は、会場前の展示スペースで会員団体活動パネル展示があり、熱の入った充実した一日となりました。

イベント情報

日本ホタルの会談話会『ホタルはなぜ光るの？どうやって光るの？(仮題)』を開催します。

2008年3月春休みに今年度最後のイベントとして談話会を開催します。談話会では、子どもたちを対象に、ホタルが光る仕組みを解説し、ホタルの光を再現する実験を行います。参加者の手でホタルの光を再現してみようとする体験イベントです。詳細が決まりましたらホームページ等にてお知らせいたしますので、是非お子さんとご参加下さい。

ホタルのニュースレター（第43号） 2008年1月20日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

197-0011 東京都福生市福生 487

日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 042 - 530 - 2111

e-mail : inoue@nihon-hotaru.com

URL : <http://www.nihon-hotaru.com>



印刷 文明堂印刷株式会社

239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町 1-5

TEL : 046-841-0074 FAX : 046-841-0071